AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

マニラ日本人学校における総合学習型日本語指導プログラムの開発

AG５運営指導委員・目白大学専任講師 近田由紀子
マニラ日本人学校教諭 渡邉花穂

近田由紀子氏

渡邉花穂氏

2019年度、AG５は研究拠点を大きく広げました。「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」には、台北・台中・高雄に、マニラ・大連・青島の日本人学校が新たに加わり、各校の特色に合わせた実践研究を積極的に進めています。本稿では、マニラ日本人学校での取り組みを紹介します。

はじめに

マニラ日本人学校は、昨年創立五十周年を迎えた歴史のある学校です。児童生徒数四七四人（二〇一九年四月）のうち約二〇％が国際結婚家庭の子どもであるとともに、年間約四分の一の児童生徒の転出入があり、多様性にも富んでいます。

特色ある教育活動として、小学部一年生からの英会話授業の実施、年間を通しての水泳学習、現地校との交流を通しての国際理解教育、少人数授業やTT指導等の指導方法の工夫改善、日本語の習熟が十分でない児童を対象とした「日本語学級」の実施、生活科や総合的な学習の時間を使ったフィリピン理解の学習の実施を推進しています。

そして何より教職員のチームワークが良く、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための実践研究に学校をあげて積極的に取り組んでいることが特徴です。

日本語指導の課題

週一時間金曜日の放課後（小学部一～三年生は年間二十四時間、小学部四～六年生は年間十六時間）に「日本語学級」が開設され、現在三十八人が学んでいます。日本語学級で学ぶ児童らは、在籍学級での授業で教師の指示が理解できなかったり、自分の気持ちを伝えられなかったりすることがあるそうです。

英語では理解できても日本語の学習言語能力が十分でないことや教科学習を支える体験が不足していることなどによるつまずきがあることが考えられました。

しかし、対象児童個々の日本語力や多様な実態が異なること、それらを踏まえた効果的なカリキュラムが確立されていないことが課題でした。これらの課題の解決を図るためAG５として支援を進めることにしました。

AG5拠点校として精力的に進められる実践研究

一九年六月、AG５のメンバーで明治大学特任教授の佐藤郡衛氏と同じく海外子女教育振興財団の中村雅治氏がマニラ日本人学校を訪問し、次の三点について進めることを協議しました。

①金曜日の「日本語学級」で使える日本語指導プログラムの開発
②子どもの日本語能力の判定
③在籍学級での指導方法の開発

八月初旬、マニラ日本人学校日本語指導コーディネーターである渡邉花穂教諭が日本国内で研修と打ち合わせを行いました。

八月三十日にはAG５メンバーの群馬県大泉町立北小学校市川昭彦教諭と筆者がマニラ日本人学校を訪問し、授業参観・協議・教員研修を実施、本格的なスタートを切りました。この日を境にマニラ日本人学校の日本語指導チームには三好豪教諭・田中亜紀教諭も加わり、学校全体で取組む体制も整えられました。

その後、テレビ会議等による情報交換を行いながら、始めてわずか二カ月間で、DLAによる日本語力測定や年間計画の作成・学習活動案の作成等が精力的に進められています。十月から授業実践も始まりました。

今後PDCAのサイクルで改善を図り、マニラ日本人学校の実態に即した日本語指導プログラムを開発し、次年度実施予定である汎用性の高いプログラムの開発に繋げる予定です。二月には合同研究会も実施します。

教員の意識を変えた研修

多忙な日本人学校において研修時間を確保するのはとても難しいことですが、全教職員が一堂に会して研修する時間を設定していただきました。四十五分間という貴重な時間で伝えたいことを精選し、「AG５プロジェクトについて」「日本語指導

の基本的な考え方について」「国内研修報告」「在籍学級での指導について」を取り上げました。

渡邉教諭の実感を伴った説得力のある報告や、市川教諭の豊かな経験に裏付けられた具体的で分かりやすい講話により、教職員の意識が見事に変容しました。

研修アンケートから一部抜粋して紹介します。

・渡邉先生の「日本語力は国語の時間だけで身に付けるものではない」という決め台詞がとても印象的だった。道徳が教育活動全体を通して教えられていくことと同様に、語学は様々な分野からのアプローチが効果的であることを学んだ。

・「教科を学ぶための日本語力を身に付けるための日本語指導」という視点をもつことで、先生方の日本語指導への意識が変わったように思う。

・日本語指導＝日本語の語彙を増やす指導という固定概念にとらわれていた自分の考えを一八〇度変えていただけるような研修になり、大変有意義な学びの機会になった。

・他教科の中で、日本語が不得手な子たちに活躍の機会を与える授業づくりをすることは一筋縄ではないが、我々教師の腕の見せ所かと思う。

・日本語学級の児童のみでなく、児童がスムーズに学習するために必要であると感じた。

市川昭彦教諭による在籍学級における指導方法についての講話

・体験型の学習の紹介をしていただき、今後の授業で参考にさせていただきたい。

・「家庭での支援の仕方」についてとても興味深く、今後の支援に生かしていきたいと感じた。

・特に母語がしっかりと身に付いていないと、どの言語も中途半端になると聞き、納得できた。今まで出会った子から常々感じていたことなので、今後保護者にも自信をもって伝えられる。

・学校をあげて取り組むべき課題だと思った。

・日本での勤務校地域が外国籍の多い所、帰国してからもすぐに利用できる内容だったので、非常に有意義だった。

・日本語指導の内容をさらに発展させると、日本文化にもつながり、文化理解や社会性なども育むことができるのではないかと思った。

研修終了後、「日本語学級」でも在籍学級でも総合学習型の指導が効果的であるという認識や帰国後を見据えた実践への意欲も高まり、市川教諭の講話をヒントに在籍学級での授業に工夫を始めた先生方も少なくないと嬉（うれ）しい報告も伝えられました。

以下、日本語指導コーディネーター渡邉教諭から寄せられた「学びや気付き」のほか、在籍学級での実践について紹介します。

今年度、プログラム開発のお話をいただき、まずは日本語指導の現状を知るため、日本へ研修に行く機会をいただきました。

海外子女教育振興財団が共催された文部科学省主催の『トビタテ！グローバル教師フォーラム』をはじめ、今後のＡＧ５の取り組みのための打ち合わせや浜松市での研修など、盛りだくさんの日々を過ごしました。多くの学びがありましたが、その中でも特に心に残った三つのことを紹介します。

●国語の指導ではない「日本語指導」

これが一つ目の大きな学びと気付きです。マニラ日本人学校では、週に一時間、取り出し型の日本語指導を行っています。

これまで私は「日本語指導＝国語の指導・言葉の指導」というイメージをもって、児童を指導してきました。

しかし、今回の研修でその認識は大きく変化しました。本校のアドバイザーである近田由紀子先生と市川昭彦先生と打ち合わせをした際に、ＪＳＬカリキュラムの指導について講義をしていただきました。

その内容は今までの私の常識を大きく覆すものでした。「授業に参加する力を培うための日本語指導」という視点をもって指導する大切さをご教授いただき、日本語指導の可能性を大きく感じた一日でもありました。

●通常学級の中でもできる多くの日本語指導

これが二つ目の気付きです。今まで、日本語指導をするためには取り出しを行い、少人数で指導することが大事であると考えていました。もちろん、そういった指導も必要です。

しかし浜松市での研修を通して、「ある程度日本語の力が身に付けば、取り出しで行うより通常学級で少し工夫を加えて指導をすることで身に付く力もあるのではないか」と考えました。そして、「学級で児童にできることがもっとたくさんある」ということに気付きました。

「日本語学級だけに日本語指導を任せるのではなく、通常学級と日本語学級の両方で日本語の力を伸ばすことで、児童の日本語力をより高めることができる」、そんな当たり前のことに気付かされた研修期間でした。

また、そうした指導を通常学級に取り入れることで授業がより分かりやすくなり、他の児童の力も伸ばすことができます。

日本とフィリピンの工業製品を絵カードで分類

●バイカルチュラルの視点を取り入れた授業の大切さ

そして三つ目は言葉だけではなく、フィリピンの文化などを取り入れる実践も重要であるということです。

理由はまず、フィリピンのことを授業に取り入れることで、日本語学級の児童が授業に参加しやすくなるからです。自分が生まれ育った土地のことなので、自信をもって答えられることもたくさんあると思います。

次に、日本だけでなくフィリピンについても学ぶことで、より広い視野をもって物事を考えることができるようになるからです。これは、どの児童にとっても重要です。

また、視野を広げ思考力を深めるためには、考えを表現する力が必要になります。その力を養うことは、日本語力の向上につながります。

●日本語学級での社会科中心の授業

担任をしている五年生の取り出し指導では現在、社会科を中心に授業を行っています。なぜなら、社会科で習う専門的な言葉の意味を理解できていないことが多くあるということに気付いたからです。

社会科で出てくる言葉は普段の日常会話で出てこないものがたくさんあります。そのため、一学期は、自信がなく、手が挙がらないことがほとんどでした。二学期になり、社会科で出てくる難しい言葉に焦点を当てて授業をしたり、フィリピンの文化と日本の文化を結び付けて授業をしたりしています。そうすることで、通常授業で自信をもって学習活動に取り組んだり、発表したりする姿が見られるようになりました。

●「モデル文」と「バイカルチュラルの視点」を取り入れた実践

「工業生産と工業地域」では、この二つを意識した授業を行いました。

「身の回りにある工業製品」と「フィリピンにしかないと思う工業製品」を絵カードに書き、それを工業の種類別に分類しました。その際に「私が見つけた工業製品は○○です。私は、○○工業の仲間だと思います。皆さんはどう思いますか。」という「モデル文」を使って、自分が見つけた工業製品について発表しました。

「モデル文」を用意することで、全員が自分の見つけてきた工業製品がどの工業に属するのかという意見を述べることができました。もちろん、日本語学級にいる児童も例外ではありません。また、「皆さんはどう思いますか。」と聞くことで、発表を聞いている児童も友達の発表に対して自分の意見を述べることができました。

AG5日本人学校日本語力向上プログラム　二月合同研究会@マニラ日本人学校のお知らせ

〈テーマ〉バイリンガル・バイカルチュラル人材育成を目指した授業づくり～日本人学校のネットワークを力に～

本研究会は、直接先生方にお集まりいただく「マニラ会場」と、テレビ会議システムを通して参加していただく「Zoom会議システム会場」の二つを設定いたします。

ご都合のつく時間のみの参加も結構です。貴重な機会ですので多くの方々のご参加をお待ちしています。

日時　二〇二〇年二月二十一日（金）十時～十六時半（日本時間午前十一時～十七時半）

内容

①提携校による日本語力向上プログラム実践報告（マニラ・大連・青島・台北・台中日本人学校）

②参加者による情報交換会

③授業公開（在籍学級…五年生、日本語学級…一年生・二年生・三年生）

④講演会

参加申込先　海外子女教育振興財団AG5事務局

E-mail：ag5@joes.or.jp